



Special Issue : Female Soldiers and Gender — Statement of Purpose

Miho MITSUNARI
(Otemon Gakuin University)

The emergence of total war in the twentieth century marked the first moment in history when women were mobilised for military purposes on a large and systematic scale. Despite this new mode of mobilisation, the experiences of female soldiers have long remained outside the central analytical concerns of historical scholarship, rendered invisible or relegated to the margins. This situation points to the presence of gender bias not only within military history, but within the discipline of history more broadly. It also underscores the need to recognize that the military has functioned not merely as a microcosm of society, but as an institutional apparatus that enforces and reproduces state-sanctioned gender norms.

In recent years, the growing instability of the international order has led some states to reconsider the reinstatement of conscription, or even the introduction of conscription, for women. Under such circumstances, a historical re-examination of the relationship between military institutions and gender has become an urgent task for understanding the contemporary configurations of military mobilization.

This special issue addresses several central questions. First, under what historical conditions have women been positioned as “soldiers,” or conversely, excluded from that category. Second, why have the experiences of female soldiers been rendered invisible within historical narratives, and what structural factors have contributed to this erasure. Third, how have military institutions reproduced gender norms and thereby supported systems of total national mobilization. Moreover, the experiences of female soldiers have never been monolithic; they have been internally differentiated along lines of class, ethnicity, and assigned roles. Understanding how such divisions have been utilized by military and state institutions—and who has benefited from them—constitutes another crucial line of inquiry.

Taken together, these problematics provide a foundation for repositioning the historical experiences of female soldiers and for critically rethinking the interplay between military institutions and gender norms.

女性兵士とジェンダー——趣旨説明

三成 美保
(追手門学院大学)

本特集は、2024年第28回日本ジェンダー学会大会シンポジウム「女性兵士とジェンダー」(2024年9月28日開催、於：追手門学院大学)の成果をまとめたものである。当日のすべての報告・コメント(報告4篇、コメント2篇)を収録した。企画責任者は、林田敏子氏(奈良女子大学)である。本稿では、以下、三点にわたって本特集の意義をまとめ、趣旨説明としたい。

(1) 本特集「女性兵士とジェンダー」の射程と問題意識について。20世紀両大戦期には、歴史上初めて女性の軍事動員が行われた。本特集は、この時期を中心に、19世紀(近代)以降の軍隊に焦点を当てる。取り上げるのは、イギリス、イスラエル、ソビエト、中国である。戦争に女性が無縁だったわけではない。売春婦の同行や看病にあたる女性たち、女性に対する性暴力は数多く記録されている。戦う者(将兵)としての女性についてもいくつかのエピソードが伝わる。だが、女性の組織的動員という点から見ると、20世紀の総力戦は一つの大きな特徴をもつ。

20世紀の総力戦体制の成立は、女性の軍事動員を歴史上初めて大規模かつ組織的なものとした。この新たな動員形態にもかかわらず、女性兵士の経験は長らく歴史学の主要な分析対象とはならず、不可視化あるいは周縁化されてきた。こうした状況は、軍事史のみならず歴史学全般に内在するジェンダーバイアスの存在を示唆している。また、軍隊は単なる社会の縮図ではなく、国家が望ましいとみなすジェンダー規範を強制し、再生産する制度的装置として機能してきた点も看過できない。本特集が設定する中心的な問題は以下の通りである。第一に、女性は歴史的にどのような条件のもとで「兵士」と位置づけられ、あるいは排除されてきたのかという問いである。第二に、女性兵士の経験がなぜ歴史叙述の中で不可視化されてきたのか、その構造的要因を明らかにする必要がある。第三に、軍隊がジェンダー規範をどのように再生産し、国家の総動員体制を支えてきたのかという制度的メカニズムの解明が求められる。さらに、女性兵士の経験は単一ではなく、階級・民族・役務などの差異によって内部的に分断されてきた。この分断がどのように軍や国家に利用され、誰がその利益を享受してきたのかという点も重要な検討課題である。以上の問題設定は、女性兵士をめぐる歴史的経験を再定位し、軍事組織とジェンダー規範の相互作用を批判的に捉え直すための基盤を提供するものである。

(2) 各論攷の趣旨を簡単に紹介して、シンポジウム全体の成果を明確にしておきたい。

第一論文・林田敏子「『女らしく、兵士であれ』—第二次世界大戦期イギリスにおける軍務のジェンダー構造」は、本特集の総論とも言えるものである。第二次世界大戦期イギリスでは、女性が正式に「兵士」とされたものの、戦闘から排除され、“女らしさ”を保った非戦闘要員として動員された。募集広告は軍務を「家庭労働の延長」として描き、女性の魅力や若さを強調。一方で



男性兵士は女性兵士を「場違い」「性的対象」とみなし、その存在はむしろ軍隊の男らしさと男性同士の連帯を強化する役割を果たした。結果として、女性の軍事参加はジェンダー秩序を変えるところか、軍隊の男性中心性を再生産したという逆説が明らかになる。

第二論文・澤口右樹「ジェンダーとエスニシティの交差性からみる」は、イスラエル軍の女性兵士をめぐる差別の交差性に焦点を当てる。彼女たちは、「男性中心の軍構造」というジェンダー差別と「アシュケナジー／ミズラヒー」というエスニック格差が交差する中に位置する。このため、文明的で優位に立つアシュケナジー女性は軍歴をキャリア獲得機会ととらえるが、ステレオタイプのミズラヒー女性は劣位に置かれ、兵役参加も難しい。このような女性の分断によって、軍は社会の不平等を再生産・強化していると指摘する。

第三論文・前田しほ「戦後ソ連映画における女性兵士表象 1953-1985」は、ソ連の戦争神話形成において、女性兵士は国家的記憶の中で周縁化されつつ、象徴的に利用される存在となったことを示す。ソ連では100万人の女性が前線に動員されたが、戦後社会は彼女たちを「道徳的に疑わしい存在」とみなし、女性兵士の経験は沈黙を強いられた。こうした女性兵士を、戦後の戦争映画は英雄的戦闘員としてではなく、ロマンス要員・ケア役割として描く傾向が強い。女性兵士は、「男性中心の軍隊の中の紅一点」としてジェンダー化され続け、例外はあるものの、全体として女性兵士の身体はパターナリズム的・異性愛主義的な文学制度の中に組み込まれたままであったと論じる。

第四論文・中山文「中国軍旅演劇における女性兵士の表象 —『天国で君を待つ』への道のり—」は、中国の軍旅演劇の21世紀の代表作『天国で君を待つ』を扱う。軍旅演劇は、兵士教育と宣伝を担う中で「男らしさ／女らしさ」を軍隊維持の装置として描いてきた。軍隊は一貫して男性の勇敢さと成長を称揚し、女性には母性・献身・犠牲を求める非対称なジェンダー観を保持してきた。女性兵士は捕虜化や置き去りなど過酷な状況で犠牲を強いられ、功績も軽視されてきたのである。しかし、2018年以降、軍旅演劇団の解体により、今後の女性兵士像は変化を迫られていることを示した。

第五論文・長志珠絵「『女性兵士』という問い —国民義勇隊・女子通信隊・防空監視員の交差」は、女性が担った「軍と民の境界にある役割」を再検討し、女性兵士という概念そのものを問い直す。戦時末期の日本では、女性は「兵士ではない」とされながらも、実際には軍務とほぼ同質の役割（通信、空襲監視、消火、防衛）に動員されていた。しかし歴史研究は、女性を兵士として扱う視点を欠いてきたと批判する。

第六論文・石井香江「解放とトラウマの間? —アルザス地方の『ドイツ国防軍女子補助員』の経験から」は、戦後歴史学のジェンダーバイアスを指摘する。男性の「マルグレーヌ（強制召集兵）」は議論されたが、女性の経験は長く不可視化された。近年、証言・日記・回想録などが発掘され、女性の経験が語られ始めた。彼女たちの語りには、ナチ体制への加担／被害／生存戦略が複雑に絡み合う。従来「ナチ期に女性兵士はいない」とされてきたが、実際には多数の女性が「軍補助員」として前線近くで軍務に従事していたことを明らかにする。彼女たちの経験は、活動領域が広がる「解放」と軍への従属・危険・報復の恐怖という「トラウマ」の間で揺れ動くものだった。

(3) 本特集は、多様な「女性兵士」を論じ、大きく三つを明らかにした。第一に、女性兵士の経験

は既存歴史学では不可視化・周縁化されてきたこと、第二に、そのような不可視化・周縁化は歴史学のジェンダーバイアスの現れであること、第三に、明らかにされたのは軍隊が国家・社会に根付くジェンダー規範を再生産し、より尖鋭化させる形で性別役割を固定化することを通じて、国民総動員を巧みに誘導していたことである。

軍隊・兵士のジェンダーバイアスは社会の単なる縮図ではない。それは、「あるべきジェンダー規範」の歪んだ強制にほかならない。昨今の不穏な国際情勢の下で、徴兵制が復活し、女性への徴兵制を導入した国もある。軍隊そのものもつ暴力性や非人道性を抜きにして軍備増強論を語ることは、結果的には非戦闘員を含む多くの市民を巻き添えにする。女性を単なる被害者として語るだけでは、軍事暴力の本質は掴めない。女性も分断される。こうした分断による恩恵を被るのは、だれか。歴史をふまえて、改めて考えなおす必要がある。このたびのシンポジウムは、その意味でも避けて通れない重い問いかけをもつ。